

□「宮古国」の「宮古語」□ 方言学の柴田武教授逝く

仲宗根將一

二〇〇四（平成十六）年六月十日、作家の井上ひさし、大江健三郎、加藤周一ら九人の著名人が「憲法九条の会」アピールを発表して以来、今や全国各地域・職場等に七〇〇〇余の「九条の会」が結成され、それぞれ工夫をこらした多様な活動をつづけているようである。「みやこ九条の会」は二年後の二〇〇六年七月三十日の結成である。只一点「日本国憲法」に平和憲法を守る意義を話題にしつつ地道に会員を増やす活動をつづけている。

翌二〇〇七年三月には、宮古に「九条の碑」建立実行委員会を結成し、三〇〇余人の賛同を得て、六月二十二日「慰霊の日」に市街地を一望できるカママ嶺公園に建立した。除幕式当日は宮古島市の市長並びに議会議長も参列して祝辞を述べられた。席上、実行委員会は「九条の碑」を幅広く市民各層に活用してもらえよう市に寄贈した。

こうした日本列島最南端の人口数万そこらの小さな島の動きをどうして知ったのであろうか。東京に本社を持つ新聞社の取材を受けた。一週間後、記事の掲載紙が送られてきた。一読して、「我が社は護憲派です」と名乗った、その若い社会部記者の誠実な取材姿勢に応えるべく、日ごろは余り馴染みのない紙面のすべてに目を通して驚いた。そこには思いがけず、沖縄に宮古にもゆかりのある方言学者の柴田武先生の訃報を伝える記事が掲載されている。「方言研究」「新明解」編者 柴田武さん死去 八十八歳の見出しで、およそ次のような書き出しである。

——日本の方言研究の第一人者で、「新明解国語辞典」の編者の一人としても知られる言語学者の柴田武（しばた・たけし）さ

んが（七月）十二日午前七時四三分、低酸素症のため神奈川県横須賀市の浦賀病院で死去していたことが二四日分かった。八八歳。名古屋出身。自宅は東京都港区高輪二の六の五。葬儀・告別式は親族で済ませた。「偲ぶ会」は九月三十日午後東京都港区・ホテルパシフィック東京…、（中略）東大言語学科卒。国立国語研究所で方言研究に携わった後、埼玉大の教授などを務めた。東大名誉教授。……云々——。

柴田教授の話題が出るごと、時として宮古方言について語られるたびに、脳裏に浮かぶのは、三十数年も前の盛夏のどある日、宮古琉米文化会館大ホール（現市立図書館二階）での教授の講演である。教授はその講演のなかで、宮古方言が「日本語であることにはミジンも疑わない」が、他に「通じない」ほど、「日本語がこんなにも変えることができるかなと思うほど——これ以上変えたらもう日本語でなくなるとまではいきませんが——それほど宮古のことは日本語のなかで変りに変わったことばである」と話されたことである（『宮古教育時報』一九七二・八・一五）。

それから十日ほどして、先生は『沖縄タイムス』（一九七二・八・二四～二五）に「宮古国の宮古語と九学会連合の沖縄調査に参加して」と題し、上下二回にわたって寄稿された。宮古方言のもつ独自の、地域性ゆたかな世界が、同じ日本語の範疇にあつてなお、「宮古国の宮古語」と言わしめるほどに、激変している現況を具体的事例をあげて考察しておられた。

九つの学会の共同体である「九学会連合」の沖縄調査は、本土復帰を挟んだ一九七二～七三年の三年間おこなわれた。沖縄の自然的諸条件と社会的特質を総合的にとらえ、調査研究することは、日本文化の基本的構造を解明する上できわめて大きな意義をもっている——との観点で、「沖縄の自然・社会・文化に関する総合研究」を共同課題に取り組まれた。その成果は『人類科学』24、25、26（一九七二～七四年）に収録されている。当時東京大

学教授で、日本言語学会に所属して調査に参加した柴田教授の「宮古方言の研究とその意味」と題する論考は、初年度の報告「24」に収録され、講演や「寄稿」に至る背景を詳細に整理、展開しておられる。

九学会連合の沖縄調査に日本言語学会は柴田教授ら六人が参加、二年間宮古のみを集中的に調査研究している。調査に当たって宮古方言を取り上げる理由を三つあげておられる。要旨は次のとおりである。

第一の理由 宮古方言は言語構造の点で、沖縄本島、八重山と鼎立する一大方言である。基礎語彙二三五語の三者の異同、隔たりはまったくと言っていいほど同一であり、三方言はそれぞれ三角形の頂点を占めるような関係にある。音韻の面からは、宮古方言は他の二方言が持つ音素を持たなかったり、他の二方言が持たない音素を持っていたりして、宮古方言と首里・八重山方言という対立が見られる。

第二の理由 日本語の古語をよく保存しているということもさることながら、日本語としておそらく最も変転を重ねた方言であるということである。この方言の研究によって、日本語の変化の可能性の極限を見ることができるようと思われる。

第三の理由 首里方言については『沖縄語辞典』（国立国語研究所・一九六三年）があり記述的研究も少なくない。八重山方言についても、八重山諸島各地の方言を集めた『八重山語彙』（宮良当壮・一九三〇年）があり、記述的研究もいくつあるのに、宮古方言については、これらに匹敵する辞書も研究もない。

とくに理由一、二については、具体的事例をあげて論究し、今回の調査を通して、「宮古語彙の完全記述」をめざしていると記している。

さきの「宮古国の宮古語」のなかでは、理由一を「沖縄と宮古の違いは、沖縄と八重山の違いに等しく、また、宮古と八重山と

の違いにも等しい」と記している。また、「宮古では、八重山のほうが沖縄に近いということをよく聞かされた。おそらく、それは発音やアクセントのことであろう。正三角形の関係というのは、単語が同じ語幹を持つているかどうかということについて調べた結果出て来たことである」とも記している。

さらに方言は「なぜ、こんなにも変わってしまったのか」、その理由について「天候でもなく、人種でもなく、性格でもなく、一に、交通のせいなのだと思う。離島という地理的条件が交通をはばんだために、それぞれの土地で思い思いに日本語を発展、変化させたのであろう」と明記しておられる。

先の新聞の訃報記事には、「国語研究所時代に手掛けた『日本語地図』や、新潟県糸魚川地域の方言を調査、分析した『糸魚川言語地図』など、現地調査を基にした詳細な研究で、日本の方言学、言語地理学、社会言語学の発展に尽力した」「ユニークな説明文で注目された『新明解国語辞典』や、ベストセラー『知ってようで知らない日本語』など一般向け日本語解説書をはじめ、テレビでも日本語の知識や面白さを説き親しまれた」とも記されている。

このような言語学界を代表する著明な学者の見解につづけて記すのは不遜のそしりは免れないが、日本語（方言）の発展、変化は「離島」という四面環海に閉ざされた地理的条件に加えて、近世人頭税制による閉鎖社会が島ばかりか村（現行字）ごとの方言をいっそう変化させた、と考えている。

柴田武教授の日本語圏全域を視野に入れた該博な言語知識、方言研究のなかで、宮古方言はその後どのように深められていたのであろうか。遅ればせながら心からご冥福をお祈りするものである。合掌。

（なかそね・まさじ）